

秘密探偵局捜査メモ

2

高木彬光

秘密探偵局捜査メモ 2

高木彬光 著

青樹社

昭和三十九年十二月十五日 印刷
昭和三十九年十二月二十日 発行

定価 三〇〇円

著者 高木彬光

発行人 土井 勇

印刷人 山森忠一

発行所 青樹社

有限
会社

東京都千代田区
神田三崎町二ノ三〇
電話(281)九七六六番
振替東京四七六四八

― 落丁・乱丁本はお取替之致します ―

目

次

幽霊復活	7
暗黒街の鬼	71
猿を飼う家	146
死の色のヌード	182
二十三才の赤ん坊	215
妖異大土教	243

装幀 山崎 晨

秘密探偵局捜査メモ 2

幽 靈 復 活

一

私立探偵事務所というものは、まるで万身上相談所よろずのようなものだ。

世間の溝さらいをもつて自任する大前田英策も、その日事務所へ出勤して、手紙を一枚一枚開封しながら、さすがにうんざりしたような苦笑を浮べていた。

たとえばそこには、七年前子供が東大の試験に失敗して家出したきり帰って来ない、八方手をつくしてみたがいまだに行方がわからないのだが、何とか探し出す方法はないだろうか——という悲しそうな母親の訴えが、長々と書きつづられている。

「この気持はよくわかるけれどももうこれは私立探偵のあつかう領域を少しはなれているようだね。大学の入学試験に一度や二度ぐらい失敗して、家出するような神経質な子供だったら、もう生きちゃいまゐ。七年もたっているのならば、法律上も失踪宣告によつて、死亡したものと見なされる……いまさら手のつけようもないよ。どこかの占いにでも行つて、見てもらうように返事を書くんだね」

秘書の池内佳子に、溜息まじりにこの手紙をおしつけると、英策はまた、次の一通をとりあげた。

「何だつて……もう長いつきあいになる彼氏が、最近、急に冷たくなって……これも私立探偵が調査するよりも、弁護士か人生案内の女史のところへ相談に行った方がよさそうだね」

しかし、その次の一通を取り上げた英策の顔からは、いままでの退屈そうな表情がふっと消えて、見る見るうちに、その眼は鋭く光り始めた。

その手紙は変っていた。差出人の住所も名前も書いていない。

この種の手紙というのは、毒のこもった悪戯か、さもなければ、何か重大な事件の端緒を開くものか、そのどちらかが例なのだが、封筒の表を返し裏を返して見ただけで、英策は張りつめている神経に、何かびーんと響いて来るものを感じたのである。

中の手紙も、たしかに奇妙なものだった。

『幽霊屋敷を買いとった女がいます。』

練馬区春日町三三番地にある家ですが、ここは七年前まで権藤豊吉、文子という夫婦が住んでおりました。二人の間には子供もなく、近所との交際もほとんどない淋しい生活が続けておりましたが、七年前に、夫の方はひどい神経衰弱にかかり、首をくくって自殺したのです。それから半年後には、残された夫人の方も、どこかへ姿を消してしまいました。

その時には、警視庁でも、夫のあとを追ってどこかで投身自殺でもしたのだろうと推定したようで

すが、その真相は誰にもわかりません。

それから最近まで、この家は権藤豊吉の弟、権藤貞吉のものとなっていました。二人の幽霊が出るという噂に恐れをなしたのか、空屋のままになっていて、誰も住み手も買手もあらわれませんでした。

いまだき幽霊などと、馬鹿なことを——とお笑いになるかもしれませんが、この住宅難の世の中に、それだけ長い間空屋になっていたことは、たしかな事実です。近所の人たちも薄気味悪がつて、近づこうともしなかったのです。やはり、噂にも何かの根拠があるに違いありません。

ところが、半年ほど前に、この家を買手がついたのです。能勢妙子という女だそうですが、これだけ因縁のついた家に住むというのは、物好きとか酔狂とかいう言葉ではかたづけられないものがあります。

恐らく、近いうちに、何か血なまぐさい事件が突発するでしょうが、こういう話を警察へ持ちこんで見たところで、相手にしてくれそうもありません。いろいろ考えてみた結果、名探偵大前田英策先生にこのことを申しあげて、御出馬と御調査をおすすめる次第です』

筆跡は注意深く変えているようだったが、前書きもなく後書きもない、自分のいいたいことを、ひとりで書きまくっているような手紙だった。

英策は最初から最後まで、じつくり三度眼を通すと、黙って池内佳子の手に渡した。

「まあ、先生、今日はいったいどうしたんでしよう。ずいぶん七年前の幽霊に悩まされるじゃありません？」

「その悩まされ方は大分違うがね……こっちの方は占いなどにおしつけてすますわけにもいかないようだ。君はこの手紙を、いったいどう思う？」

「七回忌が何かすぎたので、幽霊も成仏したんじゃないやありませんか。それで、めでたくこの家にも買手がついて」

「めでたく——と一口にかたづけられるかどうかは大いに疑問だね」

英策は額に縦皺をよせ、ふわふわと煙草の煙を吐き出しながら、

「たしかにこういう時には、こちらが下手に飛び出して行くのは、常識的には禁物だよ。持主の方では、持てあましていたこの家を買手がついて、やれやれと思っているだろうし、買手の方は、きっと事情も知らないで、仲介人にだまされたのだろう。そんなところに水を入れては、両方から恨まれるのがおちだろうが、ただ……」

「ただ、何ですの？」

「ただ、殺人事件ともなれば、黙って見送るわけにもいかならうと思ってね。その殺人が七年前に起ったものか、これから新しく起るのか、そこまでは何ともいえないが、とにかく、この手紙から発

散してくるものは、殺人の臭い以外の何物でもないね」

英策は煙草を灰皿におしつけると、ちよつと考えこみながら、

「といつても、この手紙だけでは、僕が乗り出すのには、いささかきつかけとして弱すぎるしね……とつぶやいて、天井の一角を見あげたとき、受付の女の子が、カードを持って入って来た。

物憂げにその上に眼を落した英策はうたれたように、はつと身をふるわせて、

「練馬区春日町三一三 能勢妙子——これは何だ、その幽霊屋敷の女主人公の御入来じゃないか」

「まあ！」

池内佳子も眼を見はった。

「先生、それじゃあ、この手紙も……」

「本人の書いたものじゃないかというのかね？ まさか……僕は今度はそうは思わない。それではあんまり芝居が過ぎる。偶然、偶然の一致に過ぎないのだから……たちまち、きつかけが出来るとはね。どうも、運命の神様は、僕にどうしてもこの事件に登場しろと催促しているようだね」

英策は、たちまち全身に烈しい闘志を燃え上らせたらしい。

池内佳子を鋭く見つめて、

「お客様をお通ししてくれないか」

と声の調子を強めていった。

二

能勢妙子は、水商売の出身らしい二十八九の女だった。細面でやせがたの、どちらかといえば古風な美人で、ぬけるように白い肌が、年令のわりに地味な黒っぽい和服によくマッチしていて、見るからに小粋な感じを与える。

しかし、どういうものか、どこか陰気な印象を拭いきれない。

見たところ、どうも極度の神経衰弱にとりつかれているらしい。部屋へ入って来た時の足ども、ともすればよろめきがちだったし、椅子に腰をおろしてからも、その視線は左右に迷いがちで、全然落着きが感じられなかった。

挨拶もそこそこに、

「先生、わたくしの家には、幽霊が出るのでございます……、おかげで、わたくしも、すっかり神経衰弱になってしまいました……もう、このままでは、長いこともないような気がします、これはいい、どうしたらようございましょうか」

とたずねる言葉も、最初から、どこか氣違いじみていた。

「ほう、私もこれまでに、ずいぶんいろんな事件はあつかいましたが、幽霊の調査というのは今度が初めてですねえ。いったい、それはどういうことなのでしょう？」

英策は、女の態度を仔細に観察しながらたずねた。

「夜、誰もいない部屋で、女の泣声がしてみたり、飼っている猫が突然死んでみたり、それからいろいろ、何ともいえない奇妙なことが起るのです。女中も全然いませんし、昼でもなぜか、水をかけられたように、ぞつとすることがあるのです。夜もおちおち眠れませんし、主人もしょっちゅう、うなされますので……」

「お引越しのとき、方位方角を間違えて、暗剣殺でもおかしたのですかな。もう、そうなれば、私立探偵の仕事というよりも、占いの領分のようなのですが……」

英策がわざと、とぼけた調子でそんなことをいうと、妙子は青ざめた顔をして、

「占いだったら、何軒か歩いてみました。したら、みんなが口をそろえて、いま住んでいる家には、幽霊がついているというのです。お医者さまは、そんな馬鹿な話はない、神経衰弱だろう——といって笑っておられるのですが、あんまり心配になったので、いろいろ御近所をたずねてみたら、七年前にとんでもない事件が起っていたことがわかったのです……」

妙子はいかにも恐ろしそうに、自分の調査の内容を話したが、それは例の手紙の内容を裏書きする

ようなものだった。

「おかしいこともあるものですね。これが着物や家具など買うならともかく、自分の住む家を買うということになれば、方角や家相などは最初に調べてみるのが普通でしょう。そういうことを全然気にしない人でも、どんな家で、前にはどんな人間が住んでいたかぐらいは、一応調べてみるはずでしょう。それなのに、いざお入りになってから、そういうことをいい出されるとは、少しおかしいじゃないませんか」

英策の言葉に、妙子はちらっと淋しそうな、自嘲めいた薄ら笑いを浮べて、

「これが本宅だったら、主人だって、そのぐらいのことはしたでしょう。でも、実は、わたくしは日かげのかずら、家だって、たかが別宅ですもの……名儀はわたくしのものになっていきますけれども、金を借りたことになっていて、抵当権まで設置されているんですから、わたくしがあの人と別れたら、お金を返すか、この家を飛び出すかしなければならなくなるのですわ」

「なるほど……お金は御主人がお出しになっても、あなたと別れる時のことまで考えて、投下資本だけはとりもどすようなお膳立てを整えているというわけですか。いかにも、芸の細かい話ですが、それはそれとして、こちらとしても幽霊を相手に喧嘩をするわけにもいきません。実際問題として、どうすればよいとおっしゃるのです?」